4頁が当てられている．そればかりか，画家というだけあって，主な建造物や池辺からの景観も描かれていて，要するに本書を持って歩けば，自分の立ち位置を正確に特定できる上，下手な案内パンフレットではかなわない，高度な観察ガイドになる．

図鑑的な頁では1頁4点の植物が図示されているが，すべて著者のスケッチと彩色による．解説も単なる図鑑の孫引きではなく，著者独自の文章となっていて，紋切り型の観光案内図鑑とは一線を画している．チガヤの項では「... また古くは花穂を火口（ほくち）にした」と書いたあげく，「ワカルカナ?」と付け加えたり，42頁のホウライシダでは，「アジアントスは『濡れない』を意味する ...」と書いた上，「シダハンドブック（文一総合出版）などを参照」と付け足している．アカモノがあるとは意外だった．「皇居の植物」(1989) にはこの名はない．シロモノも載っているが，これはアカモノという名前の対比として言及しているらしい．

もう一つ驚いたのは，全巻手書き文字に満ちていることだ．活字体の文の面積は，たぶん全体の1/3ほどだろう．著者は本書の資料の準備に三年を要した，と書いているが，「たった三年で?」と，信じがたい．

本書は精緻な描画を目指す，いわゆる「植物画」とは一線を画しており，「こういう行き方もあるのか」と，肩の力が抜ける人もあるだろう．とてもすぐに読み切れるものではないが，読破するものではなく，ときどきあちこち開いてみて，楽しむのがよかろう．それよりも本書を持って東御苑へ行き，観察を楽しんでもらいたい．苑内の売店（あるかどうか知らないが）に置いたら，絶好の東京みやげになるだろう．（金井弘夫 H. KANAI）

89巻3号 正誤 (2014)　　Errata in Vol. 89 No. 3 (2014)

ページ (Page)	カラム (Column)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
159	Left	↓15	cm , 5–10.5 mm	cm tall, 5–10.5 mm